

図書館情報学教育の改善 —「情報サービス概説」を中心として—

Improvement of Library and information Science Education-Focusing on “Theory of Information Services”

木内 公一郎

Kinai Koichiro

抄録：本学における図書館情報学教育改善の取り組みを紹介した。「情報サービス概説」にケースメソッドを導入するにあたり、教育心理学の研究成果や短期大学生特有の学習方略を念頭におきながら、実施した。その結果、ある一定の成果を収めることに成功した。

キーワード：図書館情報学教育、学習方略、短期大学生、情報サービス概説

1. はじめに

図書館情報学教育は転機を迎えている。平成22年度には図書館法「大学における図書館科目」が施行される。また日本図書館情報学会は「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究（LIPER）」のなかで新しいカリキュラム案を提示している。このカリキュラムは欧米・アジア諸国の教育レベルと同じものを目指すことに主眼が置かれている。しかし、個々の講義や演習の教育レベル向上についてはほとんど議論が進んでいない。特に議論の中でほとんど見られないのは、「学生サイドからみた学習」という視点である。

議論の主流は高度化した情報社会に対応する専門職を養成することを主眼としている。もちろん、これは理解できることではあるが、別の見方をすれば教育者から学生に対して、知識や技術を押し付けているように見えてしまう。また大学・短期大学では学力低下という問題に頭を悩ませている。このような状況の中でどのように教育していくのか。学習者としての学生が意欲をもって勉学に取り組めるようなシステムを考えるのが大学者としての責務であろう。

学生の視点から考える図書館情報学教育の難しさは「プロフェッショナル教育」（職業教育）

であることから来ている。理論と実務を両方学ぶことになるが、実感を伴った理解をすることが難しかった。難しい専門用語を暗記することができても、実感をもって理解することはできない。学生からすればそれが時間数が増加し、増えた科目がどのように役に立ち、課程を学ぶ中で専門職として成長できるのかという展望を示すことが必要である。科目や単位数を増やすだけでは、苦勞が増えるだけと考える学生が出て来てもおかしくない。

教育心理学の研究では、学習を支援するための様々な手法が開発されている。また、高等教育の方法としても、学習支援がもっとも大切であることが説かれている。このような研究状況を踏まえ、学生たちが意欲を持って取り組める図書館情報学教育像を確立したい。

またこの論考は以前「図書館情報学教育とアクションリサーチ—改革に向けての試案(1) —」¹を執筆した。これは上田女子短期大学の図書館情報学教育を見直し、変革するための構想に基づき実施した「概念活動モデル」の一環である。

また、現行の「情報サービス概説」を今後どのように改定するのかについても検討したい。

この小論では、まず、教育心理学の視点から学習支援と何かを定義する。その上で、ケースメソッドを一部導入した「情報サービス概説」の授業を自己点検し、改善を行う。

2. 本学の変革プラン案

これはソフトシステムメソドロジー (SSM) というアクションリサーチの一手法を使って、作成された。端的に述べると 問題の当事者が問題となっている状況を改善するために、関わっているグループのあいだに、終わりのない学習サイクルをつくり、学習行動を活性化する方法論のことをいう。²

図 1 概念活動モデル

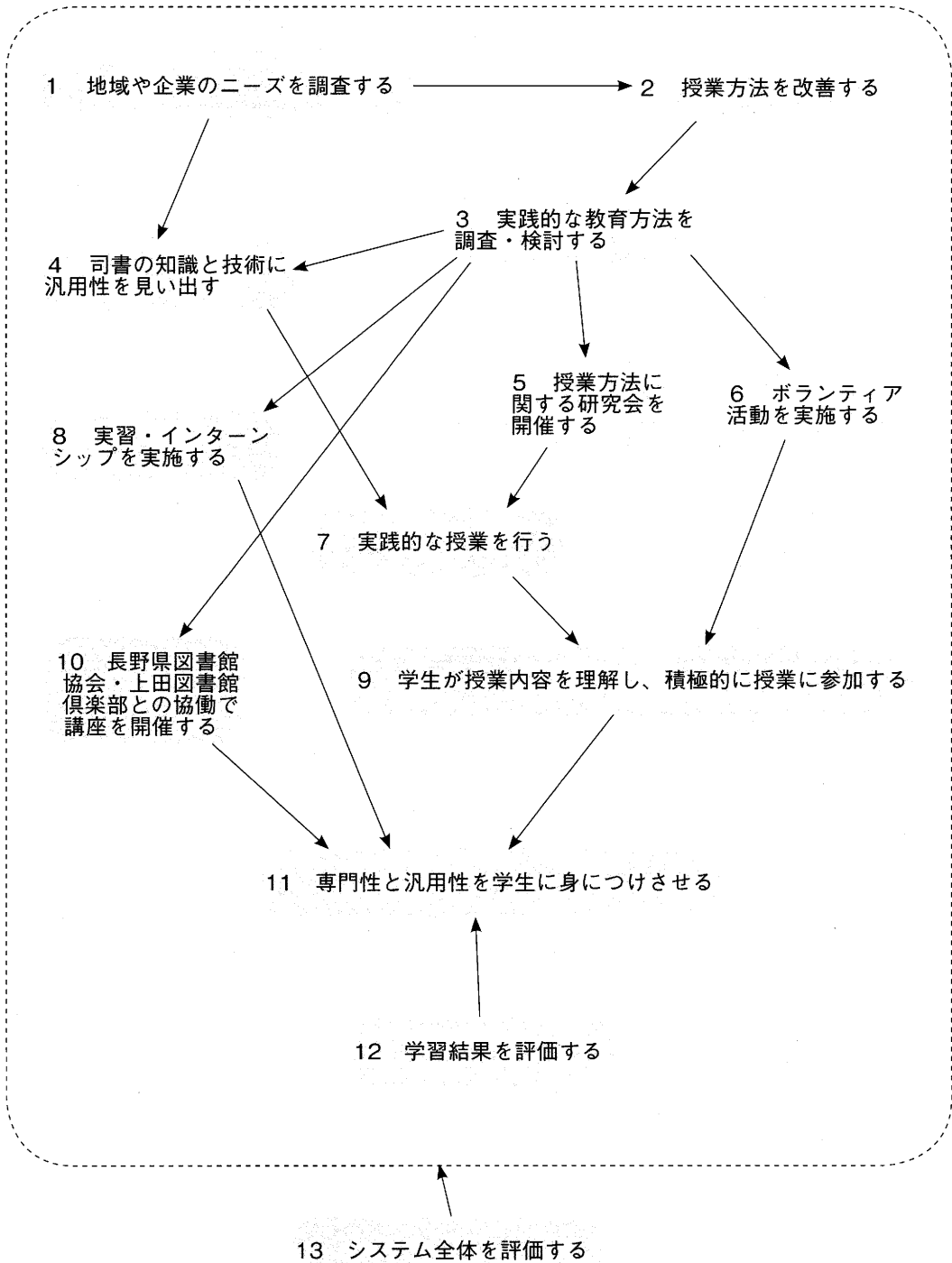


表 1 概念活動モデル比較表

| | モデルの活動 | 存在 | どのように行われているか | どのように評価されているか | コメント |
|---|----------------------|----|---|---|--|
| 1 | 地域や企業のニーズを調査する | △ | 教員が地域の学習活動に関わる中でそのニーズを知る。 | 短期大学基準協会からは「地元高等学校教員や有識者からの意見を聞く機会を増やすことが望まれる」との提言をいただいている。 | 地元企業や図書館からの聞き取り調査を実施する。 |
| 2 | 授業方法を改善する | △ | FD 活動が学内で部分的に実施されている。 | 非常勤の先生は授業アンケートを実施していない。 | |
| 3 | 実践的な教育方法を調査、検討する | × | 「情報機器論」「レファレンスサービス演習」では一部実施している。 | | ケースメソッド、ロールプレイング、フィールドワークの導入。 |
| 4 | 司書の知識と技術に汎用性を見い出す | △ | ① 日本図書館情報学会「LIPER 報告書」(http://www.soc.nii.ac.jp/jslis/) 国立大学図書館協会人材委員会、②大学図書館が求める人材像について—大学図書館職員のコンピテンシー（検討資料）、2007 年 これらの研究では大学図書館員の一般的コンピテンシーとしてコミュニケーションや企画などの能力にも多く言及している。 | レファレンスサービスの技術や目録の他にコミュニケーション技術も重要とされている。 | 学生の就職先は一般企業が多い。課程本来の目的から外れるが、この課程のなかで汎用性のある知識も重要である。 |
| 5 | 授業方法に関する研究会を開催する | × | 検討されたことはない。 | 講師の先生方への交通費や謝礼をどうするか。 | 講師の先生方の出講日に合わせて、ミーティングの形式にすることも検討する。 |
| 6 | ボランティア活動を実施する | ○ | 山浦講師の指導の下、塩田西小学校に 6 名の学生を派遣。 | 地域教育への貢献として期待されている。 | 参加学生をどのようにして増やすか。 |
| 7 | 実践的な授業を行う | △ | 筆者の担当科目では「情報機器論」「レファレンスサービス演習」で実施している。 | 工夫の余地がある。 | ケースメソッド、ロールプレイング、フィールドワークの導入。 |
| 8 | 実習やインターンシップを実施する | ○ | 2 年の在学中に 5 回参加する機会がある。 | 学生は自分の進路を見極めることができる。 | 参加学生をどのように増やすか。 |
| 9 | 学生が授業内容を理解し、積極的に参加する | × | 授業によってばらつきがある。 | 学力に不安のある学生が増えて来ている。 | 理解のレベルを具体化する。 |

| | モデルの活動 | 存在 | どのように行われているか | どのように評価されているか | コメント |
|----|---------------------------------------|----|---|---|---|
| 10 | 長野県図書館協会・上田図書館倶楽部、その他研究団体との協働で教育を実施する | ○ | 情報検索基礎能力試験の対策講座の実施。通常授業に上田図書館倶楽部会員を招請。 | 学生が自主的講座に参加するなどの効果が見られる。情報検索基礎能力試験の合格率は50%。 | 講座に参加した学生を増やすこと。さらに試験の合格率を高めること。 |
| 11 | 専門性と汎用性を学生に身につけさせる | × | 少数の学生は身につけている。 | | 実践的な教育方法の中に専門知識とともにコミュニケーションや企画書等の技術を盛り込む。 |
| 12 | 学習結果を評価する | △ | 通常の授業ではレポート・試験等で評価している。 | 実際に現場や業務で使える力を身につけているかどうかはわからない。 | ケースメソッドなどの方法論の評価方法を参考にする。 |
| 13 | システム全体を評価する | × | 個々の授業や実習への評価は十分ではない。また図書館司書課程をシステムとして評価することはまだ出来ていない。 | 図書館司書課程を評価する基準は受講者数や図書館司書への就職率である。 | 3E基準 有効性：この教育は地域の人材育成に貢献しているか。 可働性：この教育システムは機能して結果を出すことができるのか。 効率性：このシステムは最小限の資源で機能するのか。 |

図1では図書館情報学教育システムの要素をダイアグラムで表現した。表1は個々の要素を評価、検討した結果をまとめたものである。

このプランでは最初の段階として、地域や企業の人材に対するニーズを調査する。人材像を明らかにした上で司書に必要とされる技術と知識が一般社会でどのように適用できるのかを検討する。

学生が専門性と汎用性を身につけることができるように授業方法の改善を行う。実践的な教育方法を調査し、関連する活動として、授業方法に関する研究会を開催し、専任と非常勤教員が協力して、授業を改善する。また、図書館実習・インターンシップ、図書館団体と協働し、学生の教育を実施する。

実習や実践的な授業によって、学生が積極的に授業に参加し、理解するようになる。学習結果を評価する指標を用意する。またこれら一連のプロセス全体を評価する手法を導入する。この研究では概念活動モデルの3、7、9の活動の実践として位置づけている。

3. 教育心理学からみた学習支援

学習者として学生という視点からみたととき、何を達成していればよいのであろうか。図書館

情報学の理論を理解していること、実践力を身につけていることが必要であろう。一般的には自律的な学習態度を身につけていることが、よいとされている。これは学生から社会人になったときにも大切なことである。特に図書館情報学の知識や技術は変化がはやく、教えてもらうことを待っているようでは追いつかない。自ら状況や環境を判断し、学習を進める能力を持っていること。さらに進んで状況を変えて行くことができることが理想である。そのためには教育心理学の研究成果を応用していくことが適当であると考えられる。

図書館情報専門職をめざす学生はどのような「自分」になればよいのであろうか。特に理論、技術など具体的なものは提示されているが、これはある程度時間が経過すると陳腐化してしまうものである。よく思考し、状況に応じた認知処理ができたほうが現場で役に立つのではないだろうか。教育心理学の分野では学習方略の研究が進んでいる。学習方略とは勉強を効果的に進めて行く方法のことである。その中で、図書館情報学教育に関連の深いと思われる方略を紹介する。

(1) 深い処理の学習方略と浅い処理の学習方略³

前者は物事の理解に意味を見いだす。後者は物事を理解するのではなく、暗唱したり、暗記したりする認知方法である。深い処理をする学習者のほうが学業成績がよいとされている。

(2) 自己制御学習

自分自身で学習の計画や目標を管理しながら、状況に応じて柔軟に活動を調整していく学習のことである。⁴ このような学習は学生のみならず、現役の図書館職員にも求められる。学習方略やメタ認知、動機づけなどが深く関わってくる。動機づけとは、「あることを行う理由」のことである。特に「内発的な動機づけ」つまり本人の自覚によって、動機づけされるとより効果があるとされている。もちろん外発的な動機づけが一概によくはないわけではない。学生には必要な場合もある。

メタ認知方略とは、自分の理解の度合いなど、認知的な状態をモニターし、それに基づいて学習行動をコントロールすることをいう。

自己制御学習とはこのような要素が含まれている。変化が激しい現代社会ではそれに対応し行動することが必要である。特に図書館職員にはこのような自律的な行動力が必要である。また将来、この仕事に就くであろう学生たちには自己制御学習を身につけておくことが必要であると考えられる。

(3) 短期大学生の学習方略

短期大学における図書館情報学教育を考えるとときに重要なポイントは短大生が採っている学習方略や動機づけである。

短期大学生と4年生大学生の学習方略には違いがあることがわかっている。伊藤氏⁵によれば、4年制大学生は自己調整（制御）の学習方略を利用していること。動機づけについて内的な動機づけができる4年制大学生に対して、短大生は外発的な動機づけを必要とする。その点も考慮し、授業計画も組み立てた。短期大学生にとって自己制御学習を習得することは難しい。しかし、深い処理の学習方略を経験し、情報サービスの仕組みを理解することは必要である。

4. 学生中心の学習 (Student centered)

前節では理解されたような傾向をもつ短期大学生にはどのような教育方法や授業技術が必要なのか。

ケン・ベインによればその著書「ベスト・プロフェッサー」⁶のなかで「学生中心」(student-centered)という概念を強調している。端的に言うと、教員または学問よりも、学生の教育の出発点に置くという意味である。

「ティーチング」も学生が学ぶことを援助し促進する手段と位置づけている。授業の最初段階に学生は理論的枠組みやメンタルモデルを持ち込むと言われている。例えば「図書館司書の仕事は静かな環境である」、「貸出がもっとも大切な仕事である」などは学生が抱く典型的な図書館のイメージである。これらは学習を阻害する原因にもなる。そのためいかに説得し、納得させるのかということが課題となる。

授業の工夫としては自然で批判的な学習環境を創造する。自然とは好奇心がかき立てられ、興味をもつような本物の課題に出会うことであるとしている。これには学生が学ぼうとしている技能、習慣、情報が含まれている。そして、批判とは学生が批判的に考えることを学び、証拠をもって論理的に考え、様々な知的基準を活用して自らの論理的思考を検討し、思考を改善する。さらに他人の思考について厳密かつ鋭い質問を提起する。

これらの方法論はケースメソッドの根拠となるものである。そしてその効果についても、期待できるものである。学生が主体的に批判的に考え、学び、論理的に証拠をもって検討する。

そして刺激的な行動、質問、説明で学生を引きつける。「なぜ」という質問は学生の思考を積極的に動かす。ベインの見解を読むと、深い処理の学習方略を実践しているということがわかる。

5. 「情報サービス概説」の問題点

以上のようなことを踏まえて、本学の図書館司書課程の「情報サービス概説」の取り組みを紹介する。「情報検索演習」、「レファレンスサービス演習」の基礎および理論的な説明を行う科目として設定されている。理論と演習を分けるという考え方は理解できるが、学生が学習を行うという視点から見ると必ずしも合理的は言えない側面も存在する。なぜならば、学生からすれば「情報探索行動」、「レファレンスインタビュー」を経験したことはない。それを理論として講義形式で説明することは極めて困難を伴う。実際に体験させながら、理解させることが必要である。特になぜ学習するのかという動機づけの点において、短期大学生は難しい。内発的に動機づけができる4年制大学生のようにはいかない。極めて念を入れた教授計画が必要になる。2008年度現在で検討されている新「大学における図書館科目」案においても、「情報サービス論」(仮称)として、残される可能性が高い。

本学では情報サービス概説は2年前期に開講している。また1年後期に開講している図書館経営論の担当が筆者であることから、この2科目を連続性を持たせるようにしている。これにより図書館の経営とサービスの関連性やつながりを具体的にイメージすることができる。「こ

れからの図書館の在り方検討協力者会議」でも現行の科目は図書館全体をとらえる視点が弱く、個別科目間の相互関係が不明確であると指摘されている。⁷

現場では情報サービスとは、図書館経営の改善の結果現れてくるものである。さらに実践的な見方をすると、新しいサービスを実施するには人や設備、資料、資金などの用意が必要である。そして何よりも人を説得し、「なぜ新しいサービスが必要なのか」ということを図書館の上層部や教育委員会、市事務当局に納得してもらわなければならない。そしてなぜ新しいサービスができるのか、改善すべきことは何か、経営レベルと作業（現場）レベルの関連をより深く理解することが必要であると考えた。情報サービス自体が目的ではなく、利用者の要求を満たし、地域に役立つ図書館に変えて行くことが本来の目的である。そのためには情報サービスを導入するまでのプロセスや運営、改善（場合によっては廃止）という要素が必要である。

既述のように図書館経営論と情報サービス概説は連続して、開講されるために内容においても「概説」の「前触れ」として講義を行っている。図書館経営論では、「一つひとつの図書館はどのように動き、変化しているか。なぜ変化するのか。さらにどのように変えて行くか」を

資料 1 情報サービス概説 シラバス

授業目標

様々な情報サービスを理解するとともに、事例研究（ケースメソッド）ではグループ毎に調査・研究発表を行います。

授業計画

1. はじめに
2. 情報サービスの性質と特色
3. 情報サービスの性質と特色
4. 情報サービスの実際
5. 情報サービスの実際
6. 情報サービスの実例
7. 情報サービスの実例
8. 情報サービスの実例
9. ケースメソッド
10. ケースメソッド
11. ケースメソッド
12. ケースメソッド
13. ケースメソッド
14. ケースメソッドまとめ
15. レファレンスサービス演習事前講義

テーマにしている。単に理論を伝えるだけでなく、経営の成功事例を多く盛り込んでいる。事例分析としてはその成功要因を探ることになるが、現場レベルの情報サービスがその事例の中心となっていることが多い。それを基礎知識として踏まえさせた上で、「情報サービス概説」において情報サービスの事例を分析することになっている。

「経営論」ではテキストに沿った説明は最小限度にとどめ、経営改善事例を最大限に利用している。東京都小平市立図書館の報告書等を利用し、事例の解説を行っている。現行の「情報サービス概説」はその点が欠けていた。また、実際に近いことを疑似体験させるにはケースメソッドを導入することが最も適しているのではないかと考えた。

6. 情報サービス概説の概要

平成20年度は2年生27名、科目等履修生1名の計28名が受講した（途中で1名の失格者、さらに1名の退学者を出している）。資料1は20年度のシラバスである。講義の前半では情報サービス概念の説明を行い、レファレンスサービスと情報検索との関連性を理解させる。5回目以降は事例研究を行う。

この科目の本来のねらいと目的は無視しないが、より実践性を持たせるために多数の事例を学生に読むことを求めている。授業の中では「これからの図書館像—実践事例集—」（図書館未来構想研究会編平成18年3月）⁸を資料として利用している。その中で「静岡市立御幸町図書館のビジネス支援サービス」「図書館も地域の図書館に貢献したい—鳥取県立図書館のビジネス支援事業」「イメージチェンジを図る英国の公共図書館」を授業の中で読み分析してもらう。これらの図書館は新しいサービスや事業を軌道に乗せ、従来の図書館イメージを刷新することに成功している。そのような事例を読むことによって、組織が変わっていく様子を理解することができる。

また単に読むのではなく、ALA「情報消費者のための情報サービス：情報提供者のためのガイドライン」⁹を事前に解説し、より深く理解できるように指導した。このガイドラインは、サービス、情報源、アクセス、職員、評価、倫理的規範の観点からまとめられている。これを教材として採用した理由は図書館経営との関連性をつかむには、もっとも適しているからである。特にサービスに関しては「いかにマネジメントするのか」という視点でまとめられている。特に「図書館のたてものは情報サービスにとっての境界壁になってはいけない」との記述は情報サービスの本質を突いている。学生にはこのうち倫理的規範を除く、5つの視点から3つの事例を読み、解釈し、文章化するように求めた。これは情報サービスの全体像をよく理解することにつながる。情報サービスという個別の要素も図書館経営という全体システムの一部であるということである。

(1) 静岡市立御幸町図書館

この事例では組織的に情報サービスが運営されていることを詳細に説明する。「これからの図書館像」ではミッションや目標が説明されており、これに沿ってこの図書館の目指しているものを理解させる。その上で「ビジネス支援サービス」として、どのようなサービスが実施さ

れ、どのような工夫がされているのかを説明する。(資料2参照)

(2) 鳥取県立図書館

片山前知事時代より、県立図書館の従来のイメージを払拭する様々な図書館活動を積極的に行っている図書館である。ビジネス支援サービス、健康情報サービス、学校図書館支援だけではない。

資料2 情報サービス概説レジュメ

情報サービス概説—情報サービスの運営 (1) —

2008年5月30日金曜日

情報サービスは組織的に運営される。運営にはどのような要素が必要か。

静岡市立御幸町図書館のビジネス支援サービスの事例

ビジネス支援サービスと多言語サービス (外国人向け)

蔵書数 109,000 冊

インターネット・20の商用データベース用パソコン 30台 /

(情報サービスの基礎固め) / ミッションの確定

1. ミッション (使命) 誰に何を提供し、何をしたいのかを数行の文章で表現したもの。組織内のすべての思考・行動パターンの基礎となるもの。

1) 「ビジネス情報を誰にとっても身近にする」対象→ビジネスパーソン・ビジネスに無縁の人

2) 情報の内容:ベンチャービジネス・営利非営利の様々な形態のマイクロビジネス・コミュニティビジネスに発展するための有益な情報

3) 利用者相互間の情報交流・情報編集の促進

2. 目標—ミッションを受けて何を達成するのか

1) 一次目的「市民のくらしや仕事やまちづくりに役立ちます」

2) 二次目的「市民の暮らしや仕事やまちづくりに役立つ資料を集め、提供します」

3. 行動—ミッションや目標を受けてどのようなことを実施するのか

1) サービス方針

「会社・自営業者・市民団体・役所などの活動に役立つ資料を集め、提供します。

市民の暮らしや仕事に役立ち、時事問題への関心を応える資料を集め、提供します」

4. サービスの内容

1 見せる棚づくり

2 資料収集—法律・経営・サービス業関連

3 レファレンスサービス—産学交流センターとの連携

4 講座・イベント

(3) 英国の公共図書館

貸出冊数の低下などの問題を抱えるイギリスの図書館がどのような工夫をして、利用者を呼び戻そうとしているのか、いくつかの事例を紹介している。日本とは違った発想をしている部分を強調した。以上のような先進事例を読むことによって、学生の内発的な動機づけを高めようと試みた。つまり図書館のイメージを刷新することによって、興味を高めようとした。

7. ケースメソッド

(1) 概要

ケースメソッドはアメリカのMBA（経営学大学院）等で採用されている授業形式である。¹⁰

ケース（事例）を作成し、ある状況ではどのような対処の仕方があるのか、調査・研究し、最善の策を提案する。その後は討論などを行う。教員がある特定の答えを導くのではなく、答えは様々な形になる。思考力や実戦を想定したトレーニングを行うことができる。

この授業では、ケースを創作するのではなく、事前に読んだ静岡市立御幸町図書館、鳥取県立図書館をケースとして採用した。学生の思考力をフルに活用できるような質問を設定した。単に文献を調べればよいわけではなく、学生の思考力が結果として出てくるような仕組みを構築した。インターネットを検索して、Websiteをコピーするだけでは対応できない。創造力や構想力などが必要とされる。

発表の方法や調査方法については、資料3のように丁寧に指導し、限られた時間の中で調査しやすいように学生に配慮した。これは自己制御型の学習が困難な学生への対応を考慮した結果である。また外発的な動機づけが必要なため、試験として扱うこと、社会人としての基礎力がつくということを繰り返し説明した。

(2) 評価基準

発表の評価基準としてはケースメソッドの要求事項を満たしていること。および「深い学習処理」を行い、独自の結論をまとめることができたかどうかの2点とした。

(3) 学生の発表内容—その特徴—

学生のレジュメと発表内容を検討したところ、次のような点がわかった。

質問1「静岡市立御幸町図書館ではビジネス支援サービスを実施しています。実効性のあるサービスにしていくためには今後どのような改善が必要でしょうか。」

1) 類似のサービスを実施している図書館を調査して、それらを参考に結論をまとめる。(23件)

2) 「これからの図書館」資料を読み直し、自分なりに改善点を見つけてくる。配布資料以外の事例や文献を詳細に調査し、考察した結果をまとめる。(4件)

質問2「鳥取県立図書館ではビジネス支援のほか、健康情報サービスなど新しいサービスを開始しています。なぜこのようなことが次々とできるのででしょうか」

質問2は、根本的な問いために「ごまかし」が効かない。他館のWebサイトを参考にしても答えが出で来ない。「いったい何を調べればよいのか」という質問をして来た学生もいた。

- 1) 鳥取県立図書館 website 上に公開されている文書類から答えを見つけようとする。(20件)
- 2) Website だけでなく、雑誌論文や図書を4種類以上調べ、独自の見解を示す(5件)

8. 結論

質問1は学生が深い学習処理を行うには質問がやや表面的になってしまった。それに対して質問2はケースメソッドとしての形になったかもしれない。また2回目の発表となった質問2

資料3 情報サービス概説説明資料

情報サービス概説 ケースメソッド

質問1 静岡市立御幸町図書館ではビジネス支援サービスを実施しています。実効性のあるサービスにしていくためには今後どのような改善が必要でしょうか。(発表日:6月20日)

質問2 鳥取県立図書館ではビジネス支援のほか、健康情報サービスなど新しいサービスを開始しています。なぜこのようなことが次々とできるのでしょうか。(発表日:6月27日)

以上について、考察し、発表を行う。

分量:A4一枚にレジュメをまとめる。参考文献付き(最低でも4件)

研究方法について:配布資料のほか、必ず文献調査を行い、それに基づいてレジュメを作成する。

調査手段:国立国会図書館雑誌記事索引データベースから雑誌記事を探す。

専門雑誌「図書館雑誌」、「現代の図書館」、専門書

鳥取県立図書館 Website <http://www.library.pref.tottori.jp/index.html>

はこちらが要求したレベルに近い学生も若干増えた。学生たちは今回の取り組みに対して以下のような感想文を書いている。

「2回の発表で同じ質問についての答えが、人によって違うことがわかりました。だいたい同じことを言っているのですが、自分が気づかなかったことを発表している人がいて、なるほどなと思うことがありました。」

「鳥取県立図書館について学習したことが一番印象に残っています。鳥取県知事(前)の考え方を他の県も考え、もっと図書館のあり方について、追求して行く必要があるのかもしれない

と思いました。1つ1つのサービスについてもそれを実行していくことも大切なことだと思いました。」

「図書館でビジネス支援サービスや健康情報サービスといった、地域住民のためにその図書館独自で行っているサービスを知らなくて、情報源やアクセス・サービスというものを読み取ることによって図書館の事業内容や目的というものを知ることができて勉強になった。

他の人の発表を聞いていると、自分では見つけられなかった点や、わからなかったことなどによく目がつけられていて、自分だけで調べて終わりというよりも、他の人の調べたことを聞くということも重要だなと思った。」

「図書館における様々なサービスを学んで来たなかで、実際にサービス活動等で成立した図書館を調べたりなど具体的なサービス内容を知ることができました。

地域に密着したサービスやビジネスのサービス等、基本的サービス（貸し出し、レファレンスなど）以外のサービス内容も理解できました。」

「Aさんの静岡市立御幸町図書館の「実効性のあるサービスをするための改善点」が印象に残っています。なんだか本当に今すぐ図書館員になれそうな印象を受けました。」

「鳥取県立図書館がビジネス支援サービスの他にも多くのサービスをできる理由を調べるのが一番印象に残りました。鳥取県の知事が図書館の重要性を理解していると知って、是非長野県も真似ていくべきだと思いました。」

「御幸町、鳥取、英国と、それぞれ先進的な事例を提示していただき、深く調べて考えられたのが、とても勉強になりました。ケースメソッドは「自分ならこう考える、こうしたらいいのではないかと考えていく過程がとても面白く感じられました。いつも決められた仕事を同じように続けていくわけではない、という先生の説明がとても納得できました。」

学生の感想を読むと、情報サービスの意味や仕組みをよく理解し、深い処理の学習方略を実践してきたことが推測される。

9. 最後に

短大では高度な図書館情報学教育はできないという意見もある。ケースメソッドも短大では不可能であるという意見もある。¹¹どれも試してできないということではなく、単に諸外国の教育制度を真似ているか、実践している結果を述べているわけではないということがわかる。短期大学生はかなりきめ細かい配慮が必要であり、困難を伴う。しかしこれは当然のことである。

今回の試みを通じて、深い処理の学習方略を習得させる端緒に到達したと言えるであろう。自己制御学習を習得させる試みは今後の課題としたい。(了)

- ¹ 拙著. 図書館情報学教育とアクションリサーチ—改革に向けての試案(1)—. 観光文化研究所所報 第6号, p19-35 (2008)
- ² 鈴木聡, 内山研一, 初田賢司. ソフトシステムズ方法論を用いたプロジェクトマネジメントの問題把握. Journal of the Society of Project Management Vol.7, No.6 (2005), p16-21
- ³ 藤田哲也編著. 絶対役立つ教育心理学. ミネルヴァ書房, 2007, p86
- ⁴ 藤田前掲書, p97
- ⁵ 伊藤崇達. 学生方略の獲得過程と動機づけ—4年制大学生と短期大学生を対象にした調査による検討—. 神戸常磐短期大学紀要, 24号(2002), p23-28
- ⁶ ベイン, ケン 高橋靖直訳. ベストプロフェッサー. 玉川大学出版部, 2008
- ⁷ 葉袋秀樹. これからの図書館の在り方検討協力者会議における「大学において履修すべき図書館に関する科目」に関する検討状況. 図書館雑誌, Vol.102 No.9 (2008), p650-653.
- ⁸ 図書館未来構想研究会. これからの図書館—実践事例集—. 2006 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06040715.htm) 最終アクセス: 2008.10.24
- ⁹ 渋谷嘉彦ほか. 改訂情報サービス概説. 樹村房, 2008. p159-166
- ¹⁰ 高山正也, 磯辺修子. 図書館・情報学におけるケース・スタディを用いた教育の有効性. Library and Information Science No.23(1985), p17-40
- ¹¹ 高山, 磯辺前掲論文